

## 不定冠詞主語単純現在総称文の意味特性

樋 口 万里子

### 0. Introduction

(1a)の様な総称文については、例えば(1c)との比較に見出される主語の限定詞固有の意味特性に着目した説明が多く見受けられる。だがそれだけでは、当然ながら(1b)との対照における(1a)の特性は説明できない。

- (1) a. A dog barks.
- b. A dog is barking.
- c. Dogs bark.

不定冠詞の付いた名詞には、原理的には specific/nonspecific の両方の読みが可能だが、多くの人々が指摘している様に、(1a)は通常総称文として理解され、(1b)は a dog が specific でしかなく、総称文としての解釈はできない。しかし、その理由については、これ迄のところ明らかにされておらず、Krifka et al. (1995)も謎だとしている。(1a)と(1b)との表面的な違いは、単純形と進行形というところにあり、この例ではそこが総称読みの可否を分けている様にみえるが、(2a)が示す様に、進行形の総称文があり得ないという訳ではない。ただし、不定冠詞主語の場合は、やはり総称の意味では進行形とは相いれない(2b)。(2a)には一時的な一般性の解釈が可能だが、(2b)ではその様な読みもできないのである。これは何故だろうか？

- (2) a. Cats are being born with extra toes these days.
- b. \*A cat is being born with extra toes these days.

Langacker(1996)も、(1a),(1c)の意味的相違に基づき(2a),(2b)の容認性の相違を論じようとしているが、説明としては不十分と言わざるを得ない。それ

は、筆者の見るところ、基本的に限定詞の性質の違いのみに注目して議論してしまっている為だと思われる。無論、(2a), (2b)の差と(1a), (1c)の相違とには何らかの関連が感じられる。だが、Langacker(1996)の説では(1a)と(1b)の違いはやはり説明できない。

そこで、本稿は、(1c)とだけではなく(1b)とも対照させることにより、単純現在形という形の特性にも着目し 不定冠詞主語と単純現在の両者の特性が結びついたものとして、(1a)タイプの総称文の新たな側面を見出し、(1a)と(1b)及び(2a)と(2b)の相違の説明を試みる。

議論の進め方としては、先ず1章で Langacker(1996, 1997)に露呈する様々な問題点を挙げ、そこを本稿の足掛かりとする。次に2章では、そもそも総称文とは何かということについて考えてみる。不定冠詞主語単純現在形という形自体は常に総称文とは限らないので、(1a)の総称的意味特性を議論する為には避けて通れないことでもあり、先ず見極めておくことが必要だからである。3章では、(1a)タイプの総称文の、今まで余り問題にされなかった側面、即ち単純現在形という形の意味を探る。前述した様に、本稿としては、これが(1a)タイプの総称文の意味特性を解明する為の鍵と見るからである。その上で、4章で、不定冠詞主語と単純現在の両者の組み合わせとしての(1a)タイプの総称文の意味特性について論じ、(1a)と(1b)及び(2a)と(2b)の相違、及び様々なタイプの総称文と(1a)の相違を考察する。

## 1. A Constraint on Progressive Generics

さて、(3a)と(3b)の意味の違いや、(2a)と(2b)の容認性の相違の説明を試みるにあたり、Langacker(1996)は、(1a)や(3a)タイプの文を、all, most, some等や bare plural が属する Proportional Quantifier 付きの複数主語の総称文(4)と区別し、every, any 等の Representative-Instance Quantifier、即ち文法的に

単数を表す限定詞付きの主語を持つ総称文(5)の一つとして特徴付けている。

- (2) a. Cats are being born with extra toes these days.  
b. \*A cat is being born with extra toes these days.  
c. ?\*Every cat is being born with extra toes these days.
- (3) a. A cat stalks a bird.  
b. Cats stalk birds.  
c. Every cat stalks birds.
- (4) a. {All / most / some / Ø} cats die before the age of 15.  
b. {All / most / some / Ø} cats are dying before the age of 15 these days.
- (5) a. {Every /any / a} cat dies before the age of 15.  
b. {?\*Every /\*any /\*a} cat is dying before the age of 15 these days.

Langacker は、前者のグループは、いずれも進行形が可能であり、後者タイプはどれも進行形とは相いれにくい相いれないということに注目している。即ち、前者のタイプは[event instance の集合]を profile しており、その集合には限りがないこともあることもあり、それが理由で、(4a)も(4b)も可能なのだと説明している<sup>1)</sup>。それに対して、(1a)や(3a)が属する後者のグループは[a single, arbitrary instance in the structural plane]を profile し、だから時間的に限りのある一時的な一般性は表せないから進行形と相いれないと言う。それぞれのタイプの総称文が profile するもののイメージがそれぞれ図1と図2に示されている。

確かに、(3a)タイプの総称文の主語は、多くの人々が指摘している様に、不

1) Profile というのは、Langacker の認知文法で、簡単に言えば言葉が designate している entity を指すことを言う。例えば、「弧」というのは、「円」が背景に base として存在し、その一部を意味するが、そのことを Langacker の認知文法では、その焦点化され際立った一部を「弧」という言葉が profile しているという様に使う。

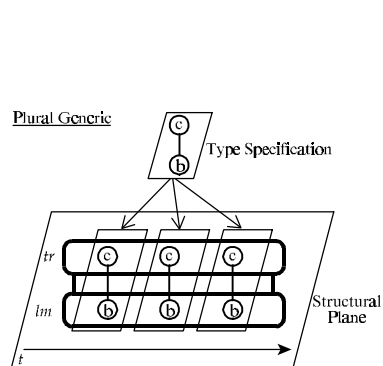


図1. Plural Generic

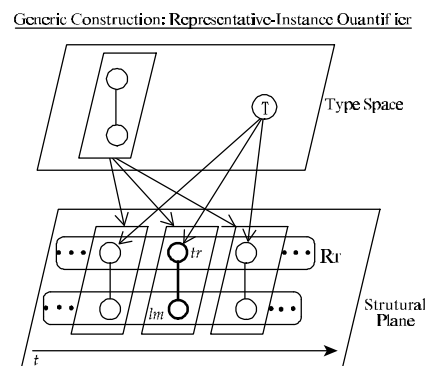


図2. Generic Construction: Representative-Instance Quantifier

不定冠詞固有の意味特性を備え、文法的にも意味的にも単数である、しかし、上記の Langacker の説明には様々な疑問が湧いてくる。そもそも event instance が集合的だと、どうして一時的なものがあり得、single だとあり得ないのだろうか？(3a)(5a)の profile する event instance は集合的ではなく一個の事態だというのは正しいかもしれない。だが Langacker は、habitual の profile する event instance については集合的だと説明し、だから habitual は進行形の場合もあると言う。確かに John smokes も John is smoking { now / lately } もいずれも何ら問題のない文だが、その主語にしても文法的・意味的に単数である。なのに、何故 John smokes の profile する event instance は集合的で A dog barks は集合的でないのだろうか？ habitual が単一の個体についての複数の event instance を profile するのであれば、(1a)や(3a)タイプの総称文も同様に集合的とは何故言えないのだろうか？この両者の違いは「主語が特定か、複数あるうちの任意の一つか」ということだけであって、同じく単一で、しかも総称文である限り、1回しか起きないことを意味している筈はないからである。又この specific か arbitrary かの違いについても Langacker は説明をしていない。

又 Langacker は、(1a)や(3a)(5a)のタイプの文が、類の代表として総称的意味を持ち、進行形と相いれないのは、「structural で任意の単一の事態を profile しているから」とであると言う。進行形は be V-ing の V の位置に来る動詞に、perfective、即ち動作等の「変化を含む事態又は時間的に限られた事態」を要求するが、(1a)タイプの文の様に structural な任意の単一の事態を profile していると、時間的に限られた一般性を表せず、それで(1a)タイプの内容は進行形と馴染まないと言うのである<sup>2)</sup>。しかし、何故 structural な任意の単一の事態を profile していると時間的に限られた一般性を表せないのかについては、どこにも説明がない。A dog is barking に特定の事態の読みしかないのである事実であり、確かに、特定でない任意の一個の事態が profile されていると進行形と馴染まないというのも事実だが、その理由は結局明らかでない。そもそも、structural な任意の単一の事態というものの正体についても明確な説明がなく、殊に structural という概念に関する Langacker の定義には問題がある。

先ず、この structural という概念だが、Langacker は、その相補的概念である actual は、特定の事態として現実上の時間を占めるのに対し、structural の方は物事の生起の青写真の様なもので、現実時間上で位置を持たないものであると説明する。従って「青写真における任意の一個の事態」である総称文が profile する事態は、現実時間の上で特定の位置を持たない事になる (Langacker :

2) Langacker は一貫して進行形は be V-ing の V の位置に来る動詞は perfective aspect のものであると説明している。Langacker (1996)では、perfective を bounded と同等視しているが、bounded であれば、boundary のところで変化が意識されるから perfective なのであり、perfective とは基本的には時間の経過に伴い変化が意識されるかどうかということである。但し、進行形が使えるか使えないかは、実は perfective でありさえすればいいというわけではなく、例えば \*I was writing a book at 6 yesterday というのは容認可能でない。これは、昨日の6時を、本を書くという複雑な仕事をしている途中とは考えにくいからであろうと思われる。しかし、進行形というのは何か変化や、一続きの纏まりの途中の状態を表すから、基本的に、be V-ing の V の位置に来る動詞は perfective という言い方は健全であるだろう。もともと状態のものは常に途中であってわざわざ途中という言い方をするのは変だからである。

1997: 208)。然しその一方で Langacker は、総称文が表わしている一般性は現実時間の上で特定の位置に投影されうるとも述べている。つまり、同時に相矛盾することを言っている訳で、全く釈然としない。

第一、根本的に、例えば A dog barks の表す内容が「現実時間の上で特定の位置を持たない」という見解には全く賛成できない。A dog barks タイプの総称文は、無論 nonspecific な犬についての叙述であって、ある特定の犬の発話時の特定の動作を表わしているのではない。だが、発話者の認識における現実世界の犬一般について現在当てはまる性質を表わしているという点では、それなりの位置を持っていると言えるからである。その内容が現実の時間において現在成り立っているからこそ、non-modal の現在形で表わされているのである。これは、Langacker 自身の認知文法の枠組みにおける基本的な原理の筈である。Cats are being born with extra toes these days も、cats について「そのうち当てはまらなくなることや、前は存在していなかったが、ここしばらく当てはまっていることが意識されている」という意味で一時的な総称文なのだから、その一般性は現実現在という時間において成り立っているという意味で、現実時間上の特定位置を持っている筈である。

この actual/structural(=nonactual)という対立概念の定義付けは Langacker も苦慮している難しい問題だが、先ずは Langacker がこの概念を説明する上で下敷きにしている Goldsmith and Woisetschlaeger(1982)の次の例で考えてみたい<sup>3)</sup>。

(6) a. This engine isn't smoking anymore.

b. This engine doesn't smoke anymore.

Goldsmith and Woisetschlaeger は、(6b)は structural、(6a)は actual という概念で区別できると言っているのに対し、Langacker は、(6a)は actual と structural の両方の場合があると述べる。つまり、(6a)で言えば、Langacker の言う actual

とは、発話時現在「煙が出るという具体的な動作がもう終わっている」という場合であり、structural の方は、主語の「最近の傾向として煙を出さなくなった」という一般性を帯びた抽象的な意味を持つ。(6a)の structural に解釈した場合と(6b)との違いは、(6b)は「もう煙を出すことはない」と言うだけで、これからの変化は意識されていないのに対し、(6a)で structural の方はこれからの変化をちらつかせているという点で一時的なニュアンスがあることである。両者に共通しているのは 'smoke という具体的な動作に関するのではなく、事態の生起の傾向又は主語の属性とでも言うべき性質を表わしているということである。重要な事は、(6a)、(6b)のいずれの場合でも、現在という特定の時間の事態を表わしているという点では共通しているということだ。それは、現在進行形も単純現在形も現在形なのだから当然といえば当然だろう。即ち actual とは個々の動詞の表わす具体的な事態に関する事であり、structural とは幾つかの事態に見られる秩序や規則性や一般性といった一段抽象的なものという様に見なしておきたい<sup>4)</sup>。

このように structural という概念を整理すると、Langacker の定義は的を得

3) Goldsmith and Woisetschlaeger 自身は Langacker が actual と呼ぶものを phenomemal と呼んでいる。単純形と進行形の違いを actual か structural かに帰するのが間違っているという Langacker が様々なところで繰り返している指摘自体は正しいが、彼等自身の description 自体がそもそも間違っていると思われる。彼等は次の様に言う。

Use of the progressive marks a distinction which we shall call the "structural/phenomenal" distinction, and which corresponds to two rather different types of knowledge about the world ... One may describe the world in either of two ways: by describing what things happen in the world, or by describing how the world is made that such things may happen in it. (Goldsmith and Woisetschlaeger(1982))

しかし、what things happen は単純現在形なので、(6b)と同じく structural であり、what things happen in the world も how the world is made that such things may happen in it も structural である。phenomenal というのは、動詞の表わす具体的な出来事が現在生じている what is happening ということで結局英語では進行形になる。

4) 但し、structural と generic は勿論同義ではない。前者が後者を包含する関係にあると言える。structural なものには他に recipe, 物語の summary, historical summary, direction, historical present, stage direction, instruction, 実況放送で使われる単純現在等がある。

ていないことや、図2はここで問題にしている総称文のイメージを反映しているとは言い難いことが解る。A dog barks タイプの不定冠詞総称文の profile する単一の事態として、図2の太線部分 (profile の部分) を主語の一般的特性と見なすことは何とかできても、その structural な事態は、やはり現実時間上の位置を持っていると言うべきだろう。

では Langacker の言う、この “an arbitrary event instance in the structural plane” とは一体こういったものを指しているのでしょうか？ Langacker (1996, 1997) の図や記述から想像するに、もしかするとそれは一般性を思い描くために心に浮かべるイメージの様なものかもしれない。一般性といった抽象的な概念を把握する為、我々は具体的な例を当てはめてイメージする。例えば (3a) では或る猫の習性というものを心に描く為「猫が鳥に忍び寄る具体的なイメージ」を浮かべる。するとそのイメージには時間的アンカーはありようがない。しかしながら、(3a) がそのイメージを profile していると考えるのは、非常に奇異である。抽象的なものを把握しようとして具体的な例を挙げて思い浮かべれば、それがその抽象的なものの profile だというのは納得できない。例えば、「幸福」という概念をイメージするのに家族の団欒をイメージしたとしたら、家族の団欒が「幸福」という言葉の profile となり、家族の団欒という言葉と「幸福」という言葉の profile が同じということになってしまい、おかしいことになる。この場合家族の団欒というのは、幸福感をもたらす具体例に過ぎず、幸福感をもたらすものは他にもいろいろあって、そこに共通するものを「幸福」という言葉が profile していると考えた方がより自然であろう。イメージに時間的アンカーがないと言えばそうかもしれないが、A cat stalks a bird が「猫が鳥に忍び寄る具体的な行動の集合的イメージの中の任意の一つ」といった一般性を思い描く手掛かりに過ぎないものを profile していると考えるのは無理がある。例えば「猫が鳥に忍び寄る具体的な行動」にはイメージの上でも、始まり

と終わりがあがる (即ち perfective な) ので単純現在形で表される筈はないが、A cat stalks a bird は単純形である。

以上ここまで、幾つかの概念を整理しつつ Langacker の説明の問題点を指摘し、Langacker の説明では (2b) が非文となる理由の説明になっていない事、同時に、A dog barks タイプの不定冠詞総称文が profile するのは「不特定多数の同じ名前を持つものを背景とした単一で任意の主語の一般性そのものだ」と言って差し支えない事、そしてその一般性は、現実時間上の位置を持つと考えべきである事を述べてきた。しかし、それでは (2b) が容認可能でない理由をどう考えるべきであろうか？ 単一的主語に関する一個の事態しか profile していないのに (1a) や (3a) は何故代表とみなされ総称文たりえるのか？ そして A dog is barking は総称文の読みが何故できないのか？ これらの主語はいずれも不定冠詞なので、犬というものが不特定多数背景に存在し、そのうちの任意の一匹という意味ではいずれの場合も同じはずである。更に A dog barks タイプの総称文はどのような特性を持つのだろうか？ これらの問いに取り組む為には、先ず、総称文とは何かということや単純現在の性質等について少し言及しておく必要がある。次章で総称文について、3章で単純現在形のメカニズムについて簡単に触れ、A dog barks タイプの総称文の意味特性を洗い出してみたいと思う。

## 2. Genericity and Generics

そもそも総称文とは何だろうか？ 総称的読みができる、又はする、ということはどういうことなのだろうか？ 様々な名詞句や文に関してこれこれが総称的な意味を持つという言い方はよくなされるが、どういうことが総称的な意味を持つということになるのかということについては、これまでの文献には明確な記述はない。Krifka 等も genericity を巡り、何が総称文を総称文と見なす決め

手となるかを探し求めているが、結局暗礁に乗上げている状態である。恐らくそれは、総称文の本質も、様々なパターンの総称文の個々の意味も明らかにしないままに、自然言語を論理式に当てはめていこうとする方式のせいもあるだろう。本稿ではターゲットを一つの形に絞ってはいるが、やはり、総称文全般についての一応の理解は、この一形式の総称性を論じるにも必要であると思われる。

それに先だって、英語の generics と日本語で総称文と呼ばれるものとの違いについて、少し注意が必要かもしれない。英語の generics は、genericity あるいは general validity を表わすものという意味で広義に捉えられており、habituals(7)の様なものまで含まれ、実際に多くの場合 generics の議論には特に区別されることなく habituals も登場する。これに対し、日本語で「総称文」と言えば、総称という言葉の意味をどうしても無視できないので「総称的主語名詞の指す集合の一般性を表わす陳述」のことであり、指示対象が唯一的な habituals は含まれないのが一般的である<sup>5)</sup>。しかし、本稿では、generics の意味で「総称文」という言葉を使うことにする。

generics と言えば、(7)や(8)の様なものが典型例として思い浮かぶが、Krifka 等が述べる様に、名詞句の形にしても、不可算名詞(9a)や様々な限定詞が付いたもの(9b)など、動詞の形も、単純現在に限らず過去形や助動詞を伴うもの(9c)、完了形(9d)、進行形(9e)等の場合があり、語意的に総称的な意味を表わす場合も含めると実に様々な形がある(9f-k)。

(7) John smokes.

(8) {A beaver builds / the beaver builds / beavers build} dams.

(9) a. Milk is healthy.

5) 本当はそうだと、よく考えれば任意の単一体を主語とするとされる不定冠詞主語の総称文は、どうしても問題になり、この辺が総称文の説明が一筋縄ではいかない所以となっている様である。

- b. {Any/ Every} beaver builds a dam.
- c. John {smokes/ smoked/ will smoke} a pipe.
- d. The elephant has come dangerously close to extinction.
- e. Synthetic skin is replacing animals in the testing of cosmetic products.
- f. John is {usually/ always/ often} smoking a pipe.
- g. John {used to/ has an inclination to} smoke a pipe.
- h. Bill frequents that pub over there.
- i. Milk tends to sour during thunderstorms.
- j. Your typical Australian drinks too much beer.
- k. Man has lived in Africa for more than 2 million years.

しかもこれらの形自体は、当然ながら generic な意味を持つ場合もあれば non-generic(episodic)な場合もあり、多くの場合、形だけでは generic か non-generic かの区別はできないことが想像できる。例えば、不定冠詞が主語で単純現在であるからといって、常に総称文とは言えない(10)。

(10) A bird is in the cage.

A dog barks にしても、例えば脚本のト書きの一部にある場合等、総称文ではない読みも可能である。しかも、どんな形をしていても generic の読みが可能だという訳ではなく、その意味では generic の解釈ができるかどうかは形と全く無関係という訳でもない。冒頭で述べた様に、A dog is barking 等の不定冠詞主語進行形の如く総称文としての解釈ができないものもある。更に言えば、不定冠詞主語現在進行形の主語は nonspecific の解釈が不可能というわけでもない。(11)の a child は nonspecific だが、容認可能である。但し、(11)は統計上このような割合で物事が起きている発話時点での現象的事実を意味しているのであって a child についての一般的性質を言っているとは言い難く、総称文

とは言えないであろう。

(11) A child is dying every 5 seconds in the world.

あらゆる例について generic か nongeneric かの判断ができるかどうかは別としても、我々は、この様に、少なくともある程度その判断ができるのも事実である。その判断に関するパラミターとしては、Langacker が言っている様に、「時間」と表現される事態に関する「参与者」(participant(s))の二つが考えられるだろう。本稿では generics の側面の一つとして、「時間」と「参与者」の少なくともいずれか、またはその両方の広がりを感じられる何らかの一般性があることを押さえておきたい。(7)の様な habitual は、参与者は特定の一人だが、表わされている習慣という性質は時間的な広がりを持っている。(12)の例は時間的には一点と見なしてよいが、参与者の方が複数で集合的でありその集合の成員に共通する事態として因果関係が感じられ generic と見なされ得る<sup>6)</sup>。

(12) Cats went crazy all over Japan at 4 AM on December 19th.

従って、Lyons(1977: 194: 11)の「generics の表わす命題内容は timeless だ」という記述は、Krifka 等が指摘する様に誤りである。Lyons は(13)の様なごく典型的な例だけを念頭においているだけであろう。

即ち典型的な generics には、時間と参与者の両面の広がりにおける一般性が関わっているといってよいだろう。(13)の beavers は複数という意味で、the beaver は identify できる類全体という意味で、そして a beaver の場合は、それ自体は任意の単一個体だが(habituals と異なり)、背後に不特定多数の広がりを感じられるという意味で、三者三様の広がりが存在し、かつその一般性の validity には特に時間的な制限は意識されていない。

(13)(= (8)) {Beavers build/The beaver builds/A beaver builds} dams.

6) これは総称文について一般に言われている、「類の全てに当嵌る一般性」ということと、とりたてて大きな差はないかもしれないが、generic と呼ばれるもの全体の共通の性質はこれくらいと思える程、generic は多岐にわたる。

この様に、総称文には、Lyons が念頭においている(13)の様な時間的な制限を特に意識しない、ごく典型的なものと、時間的な制限が意識された、又は念頭にある、あまり典型的でないと感じられるものがある。(12)は総称文の一種と見なされるが、(13)の例程典型的でないと感じられるし、Langacker の挙げる一時的な一般性を表わす(14a,b)もあまり典型的な類いではない。注目したいのは、不定冠詞主語は、どうもこの典型的でない類いの一時的な一般性と馴染まない様だということである。

(14) a. Cats are being born with extra toes these days.

b. My cat is stalking that bird every morning again.

c. \*A cat is being born with extra toes these days.

一時的な一般性を表わすのは、何も進行形だけではない。変化の意識という要素は無くなるが、単純現在形の場合でも(15a)の様に these days 等で期間を示すことができる。だが、やはりそれが可能なのは複数主語や habituals の場合であって、不定冠詞主語の場合は可能ではない。これは単に主語が単数かどうかという問題ではない。(16)の主語は、文法的にも意味的にも単数だからである。

(15) a. Children have longer legs these days.

b. \*A child has longer legs these days.

(16) Fido barks strangely these days.

以上この章では、generics について、1) 形だけではそれと判断できないが、形と全く無関係でもないこと、2) 大方のところでは generic / nongeneric は、時間と参与者のいずれか又は両方の広がり何らかの一般性を感じられるものかどうかで区別できること、3) 時間的な制限を特に意識しない類いのもとの一時的な一般性を表わす場合の2つのレベルがあることを述べてきた。同時に、広義の総称文の中でも A dog barks の類いの総称文の特徴としては、1) 主語が文法的には単数だが背後に集合的要素を備えているという点と、記述されて

いる一般性に特に制限の意識されない点で、「参与者」と「時間」の両側面で広がりがあり、典型的な総称文の部類に属すること、2) 一時的な一般性と相いれないこと、を見た。しかし、A dog barks がどうして何らかの一般性を持ち得、A dog is barking が持てないのかについては、総称文の性質だけや、不定冠詞の意味だけを見ても始まらない様である。といっても A dog barks の残る形式的要素としては、単純現在形ということしかない。そこで次章では、単純現在形の特性を捉え、A dog barks に総称文の解釈が可能で A dog is barking に可能でない訳を探る足掛かりとしたい。

### 3. Properties of the Simple Present in English

この章では、A dog barks の類いの総称文の特性のファクターの一つとして、単純現在形の性質を捉える。それには、先ず imperfectivity という概念を明確にしておく必要がある。

Langacker(1987: 244-254)が述べている様に、動詞の表すものというのは時間の経過に伴って捉え得る概念である。そこには大きく分けて、時間の経過に伴い「変化があるもの」と「変化がないもの」の二通りがある。これが認知文法で言う aspect であり、前者は perfective、後者は imperfective と呼ばれている。一般的に、それぞれ動作、状態などと言われているものに当たり、Vendler(1967)の分類でいえば、achievement, accomplishment, activity の三つが perfective で、stative, state 等と呼ばれているものが imperfective に相当する。動詞の表わす概念は、その動詞に関する主語や目的語等を含む要素に依存してイメージが決まるので、アスペクトの区別もそれらの要素に影響を受ける。例えば、同じ surround という動詞を使っても(17a)は動かない事物の静的な情景を表わすので、(17a)における surround は imperfective で、(17b)は主語の動きの途中を表わしているので、この場合の surround そのものは perfective である。

同様に、(18a)の wind も動かない地図上の道路の形態を表わすので imperfective で、(18b)の wind は車に乗って動いている人から見た変化のある光景なので perfective である。また、通常、resemble や live 等の様に状態動詞と言われているものも、(19b)では変化の途中であり、(20b)では基本的には状態だが一時的で、即ち違う場所での生活へ変わるという変化が意識されているので、いずれも perfective と見なされる。

(17) a. An empty moat surrounds the dilapidated castle.

b. The SWAT team is surrounding the dilapidated castle.

(18) a. The road winds through the mountains.

b. The road is winding through the mountains.

(19) a. Ed resembles his father.

b. Ed is resembling his father more and more.

(20) a. He lives in London.

b. He is living in London.

(20b)の様に、基本的には状態的なものでも、それが一時的な場合は perfective とみなすことから、最近の(1996)や(1997)等の Langacker の論文では、perfective は bounded と同一のものとして説明されている。だが、例えば The earth is revolving around the sun に感じられる動きには、必ずしも boundary が意識されているとは思えない。従って、perfective とは「変化を含むもの」であり、中味は状態でも bounded であれば始まりや終わりがあり、開始や終息というのは一種の変化だから perfective なのだと考えるべきだろう。これは、基本的には不可算名詞である water が、a water と可算名詞として見なされる場合と平行である。例えば喫茶店で水を頼む際の水はコップに入っていて、中身は物質として同質であっても境界が存在し、内側と外側という違いが区別できる可算名詞になる<sup>7)</sup>。Langacker(1987b)が示す様に、perfective/imperfective



の対立自体も、区切りがある可算名詞と区切りを意識しない不可算名詞の対立とパラレルである。

この様に、perfective な事態とは図3に示すように時間の経過に伴って変化が感じられるものであり、映画のフィルムで言えば、見ている範囲で異なる絵が存在するもので、imperfective な事態というのは、図4に示す様に、言葉が対応しているイメージの範囲において、一コマ一コマ同じ絵がずっと並んでいる様なものだと考えられる。

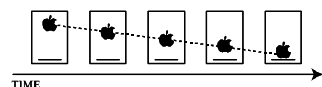


図3

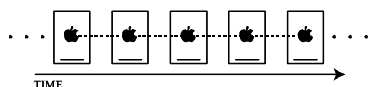


図4

そして、このアスペクトの区別で重要なことは、perfective な事態というのは、幾つかのコマが集合となって初めて一つの事態として認知可能であるのに対し、imperfective な事態というのは、どのコマを取ってきても、その一コマで動詞の全体像を捉えることができるということである。言い換えれば、perfective な事態を認識するには時間的広がりが必要とするが、imperfective な事態というのは、一瞬で捉えることができるということである。これが、単純現在という形と深く関わっているのである。

Langacker は、resemble など基本的に状態を表わす動詞が使われている場合は、(19a)の様にごく自然に単純現在形で表されうるが、kick 等基本的に動作動詞の場合、特別な解釈をしないと単純現在形では表わせないという説明をしている。例えば Ed kicks his dog は habitual という特別な解釈をするという訳である。更に Langacker(1991: 266)では、このような habitual は一種の状態で

7) Langacker(1987b)の説明にあるように、例えば、cat も常に可算名詞と考えられる訳ではなく There was cat all over the road... の様に轢き殺されて区切りがなければ不可算名詞になってしまう。

imperfective だから単純現在形になれると説明されている。しかし、そもそも我々はどのようにして特別な解釈をするのだろうか？ \*Ed is resembling his father が容認不可能である様に単に容認不可能な文、という判断を下す前に特別な解釈をしてしまうのは何故だろう。これについては Langacker は説明していないし、彼のこれ迄の記述でも説明できない。そこで筆者が主張したいのは、「単純現在形は、imperfective の解釈としか結びつかないので imperfective の解釈を促す」ということである。現在形というのは 現在という瞬間の時点で成り立っている事を表わす。(出来上がった瞬間に We made it と言ったり、たった今閃光が光った場合に It flashed 等と言う様に)一秒前の事柄も過去は過去なのだから、現在というのは一瞬一瞬の今の瞬間である。従って始まりと終わりが時間的広がりが必要とする perfective な事態とは相いれない。つまり、一瞬で捉えることができる imperfective な事態でないと、現在という一瞬では捉えられないのである。(It flashes というのは、例えばカメラのフラッシュという機能を備えているといった性質についての叙述であり imperfective である。)

ここで誤解を避けるために、現在形の意味するものについて、補足説明が必要かもしれない。というのも、Bybee et al.(1994) や Wolfson(1979)等に見られるように、「現在形は現在点を含む様々なタイプの imperfective situation を表わしていて現在だけを表わしているのではないから、“the present tense” なる呼称はこの形の名前としてはふさわしくない」という考え方が存在するからだ。しかし Harder (1996)が述べる様に、時制の意味と imperfective situation とを直接的に結び付けるのは適当ではない。例えば He was a student と言っても、彼が現在も学生である可能性はある。つまり、彼が3年前から今迄学生で(恐らくこれからもしばらく)学生であるという状況に対応していることもありうる。だとすると He was a student と He is a student は全く同じ状況

に対応する可能性もある。その様な状況自体が時制の意味だとすると、過去形と現在形は全く同じ意味を持つということがあり得、矛盾を生じるのである。やはり He was a student は「彼が学生である状況」が過去の或る時点で成り立っていたこと、He is a student はそれが現在当てはまること、をそれぞれ表わしていると考えるべきであろう。従って、単純現在形は、そういった状況そのものではなく、その状況が現在当てはまることを表わしており、“the present tense” という呼称はこの形の名前として十分ふさわしい。勿論、結果として単純現在形の文は、結局現在点を含む様々なタイプの imperfective situation を表わすのだが、それは単純現在形が imperfective situation としか結びつかないというだけなのである<sup>8)</sup>。

#### 4. Properties of Singular Generics

##### 4.1. Unboundedness

さて、単純現在形を、imperfective、つまり状態的な読みを促す要素としてみると、不定冠詞単純現在形が総称の意味を持ちうる理由とその特徴が見えてくる様に思われる。即ち、不定冠詞主語が単純現在と結びつくと、不特定多数が背景に存在する任意の一個体の存続的な性質を表すと考えられるのである。これが総称的に解釈されるかどうかは、その発話状況にある特定の referent が存在するかどうかといった語用論的なファクターに拠る。前述したように、A dog barks も物語の要約で初出の「或る犬のこと」であれば、非総称文の可能

8) 更に言えば時制を表す形態素自体は、「文の中のそれ以外の部分で表されている内容が、現在時点か又は過去の或る時点に成り立っているからその時点と同定しなさい」という「指示的な意味」を持つと Harder は主張する。この様なことから、Harder (1996)は、ここでの「彼が学生である状況」にあたる SOA という概念を提唱し、tense の意味機能と SOA の意味機能を区別し、即ち SOA を finite clause から時制の要素を差し引いたものと考え、時制そのものの形態素の意味は、SOA を当てはめる時間的位置を発話時か過去のある時点に identify しなさいと指示する機能にあると言っている。Harder (1996)も言うように、imperfectivity は SOA の性質であると言える。

性もある。しかし、A bird is in the cage にしろ A dog barks にしろ不定冠詞主語単純現在形は、いずれにせよどちらも「その名詞で呼ばれるものの一つ」という認識をした個体についての状態を表わす」という意味では同じである。従って A dog barks は、actual には解釈できず、意味的にも特に時間的制限が特に意識されることもないので、無作為に取り上げた一匹の犬についての存続的な性質と解釈される。それで特定の指示対象が意識されない場合等で、総称文的な解釈を生むのではないだろうかと思われる。特に主語が生き物である場合、同じ犬でも全て同じ DNA を持った生物は一つとして存在せず、多様性に富む。無作為の一つを取り上げて、どの任意の個体にも或る程度存続的に存在する性質というのは、かなり本質的な性質ということになるだろう。その個に本質的に備わった性質というのは、その集合の一つ一つの個にプログラムされていて、その個がその名詞で呼ばれるものとして存続する間保持するものである。だから一時的な現象とは基本的に相いれないのではなかろうかと思われる。

例えば、(21b)が容認不可能な理由も、そこにある様である。

(21) a. Children have longer legs these days.

b. \*A child has longer legs these days.

(21a)は、「何となく見受けられる傾向として、(ひと昔の子供より、又は自分達の世代が子供だった頃に比べて)不特定複数の子供達の足が長いこと」を意味し、当てはまらない子供も大勢いて構わない。「足の長さ」というのは、もともと相対的で個人差があるという意味でも、世代によって違い得るという意味でも、子供というものに本質的に備わっている性質ではないので、「最近」という「時間的な区切り」と結びつけても特に矛盾は生じない。だが、特定の個体を念頭に置かずに、同じ名詞で呼ぶものの集合からどれか一つたまたま選んだ個体に存続的に存在するといえる性質というのは、その集合のどれにもいつ選んでも基本的に当てはまること、つまりその本質的な性質でなければ考え

にくい。だから these days というように特定の期間で区切ると、奇妙なのだと思う。(A human child has longer legs than a monkey 自体はおかしくないがこれに these days が付けばおかしい)。

不定冠詞のついた名詞自体には、勿論或る特定の個体が念頭にある場合もあるが、a child を特定の子供と解釈したとしても、一人の特定の子供に関してものを言う場合、或る一定期間は観察しないと「最近長い」ということは言えないし、その様な子供に関して不定冠詞を使うのは不自然だ。例えば、A cat is on the mat 等がある特定の個体の特定の事態を指しているとしても、不定冠詞を使うということは、その名詞の範疇に入るものとしてしか認識していない、或る個体という言い方になる。その様な認識の仕方をするのは、「たまたま見た猫」の様な偶発的な知覚の対象という意味で特定なのであり、たまたまその時の状態を表わす陳述と結びつくことはあっても、存続的状況や性質をうんぬんする事とは馴染まない対象なのである。存続的な性質を問題にするには、継続的な認知が必要で、その場合その特定の猫には、所有格か定冠詞か固有名詞等が付いていたりするはずである。

従って、A dog is barking に総称文の解釈ができないのは、一般性を見いだせる要素が一つも見当たらないからだと言えるだろう。一般化を見いだすには少なくとも或る程度は存続的な事態にみられる規則性が複数に見られて因果関係の感じられる共通性が必要である。しかし、進行形は、1回にしろ繰り返しのしる bark というひとまとまりの動作の途中を意味する。特定の主語については存続的な解釈が可能だが、任意の単一個体の非存続的な事態には一般化に繋がる要素がないのである。

さてここまで、不定冠詞総称文を、その名詞で呼ばれるものの集合の一つ一つにプログラムされた本質的な性質を述べるものとして捉えてきたが、ここでいう本質的とはどういうことかについて、もう少し立入って考えてみたい。Krifka

et al. (1995) は、次の例を挙げ、「一般に総称文とは或る範疇の構成員全員又はその多くに当てはまる内容を持つと説明されているが、必ずしもそうではない」と言う。

(22) a. A turtle lives a long life.

b. A bird lays eggs.

カメは多数生まれても、通常長生きするのはほんの僅かに過ぎない。圧倒的大多数のカメは幼くして他の生物のえさになるからである。又、卵を産むのは雌でしかも成鳥で健康でなければならず、その条件に適合するのは鳥の半数以下だというわけである。かといって、彼らは結局何故(22)が総称文と言えるのかを説明しているわけでもなく、その決め手となる要素を決めかねている。ただ、確かに(22)は典型的総称文の類いである。これは何故だろうか？

まず、(22a)については、その個にプログラムされた本質的な性質を表わしていると考えれば、構成員全員に当てはまることと言えるので、特に問題はない。つまり、(22a)は、カメに genetic にプログラムされている本質的な性質として寿命が長いと言っているのであって、実際に全部が長寿を全うする事を意味しているのではない。たとえそんな幸運なカメがカメ全体のうちのごく僅かでも、DNA 上のプログラムとしては、任意のどのカメをとっても長寿ということには変わりはない。その意味で総称的なのである。

(22b)の場合の総称的意味を理解するには、Declerck が言うように、relevance や prototype 等も考慮に入れなければならないだろう。Krifka 等は relevant なものが常に総称文という訳ではないことから、総称的な解釈を生み出す要素としての relevance という概念の関与自体を単純に否定的するが、relevance という概念自体は、意味解釈が可能な全ての文の理解に多かれ少なかれ関係しているはずである。勿論、単に relevance が関係していると言うだけでは、総称文の意味が読み取れる説明にはならないという点では Krifka 等の批判は妥当だろ

う。だが、要は、実際我々がどのように文の解釈を relevant なものになっているかということにある。そこには、日本の文化では「花」といえば、「桜」を指し、「めんどり」と言えば、単に鳥でなくニワトリの雌を指すといった様な prototype も働いているだろうし、不定冠詞単純現在主語の性質を述べるという形の意味も働いているだろう。つまり、(22b)は a bird を何らかの意味で特徴付ける文ということになる。その発話の状況に特に a bird が指す特定のものがなく任意の一個の性質という意味で取らざるを得ない場合、a bird を特徴付ける要素として総称的な意味に取る訳で、哺乳類等との対照における taxonomic な鳥についての特徴的性質から、「鳥が卵生だ」という意味で(22b)を理解するという訳である。その意味では(22b)もやはり鳥の本質的性質を述べていると言って良いだろう。従って、クジャクといっても雄クジャクの限られた集合にしか当てはまらないことを表わす(23a)も a peacock の特徴的性質として自然だし、ペンギンや鶏、ダチョウ等、環境のせいで飛ぶ機能が退化した鳥の存在を知っていても、翼はもともと本質的には飛ぶ為のものであるので、(23b)も特に不自然な気がしないのだと思う。

(23) a. A peacock has colorful feathers.

b. A bird flies.

c. \*A bird lays an egg.

これは、(23c)が総称文としては大変奇異な感じがするのは対照的である。勿論鳥について本当に正しいことを言わなくても、総称文として少なくとも非文にはならない筈である。それなのに、(23c)が変なのは、恐らく I like reading a book がおかしいのと一脈通ずるところがあるだろう。読書好きという存続的状态を言うのに、その対象として読む本が一冊というのは奇異である。一羽の鳥の DNA 的なプログラムとして、卵を一個しか産まないというのはとても理解しがたい。そんな生物はすぐに滅びてしまうので、生物として存続している

とは考えられず、ありそうなこととは思えないから容認不可なのであろう。

Krifka 等は又、或るカテゴリーの全てに当てはまることが必ずしも総称文にはならないと述べ、例えば「Rainbow Lake という場所で生まれた子供が皆左利き」という現象があったとしても、何らかの因果関係が考えられるという場合でない限り、A child born in Rainbow Lake is right-handed とは言えないことや、世界中で生き残ったライオンがある動物園の3匹だけとなったという状況で、たまたま3匹とも一本足を失っていたという場合、その specific なライオン達について Every lion has three legs や The lions have three legs とは言えても A lion has three legs とは言えないという事実を指摘する。Krifka 等はその理由についても何も述べてはいないが、これは、とりもなおさず、これらの例で説明されている状況がどちらかといえば偶発的で、「存続的な現象である保証がないので、任意の一つに存在する性質といえる程本質的でないから」ではないだろうか。Krifka 等も、例えばその湖の水質に特殊性があって、左利きということと因果関係が認められる等であれば別だと言っている。それも、水中の物質が子供達の生物学的なプログラムに影響を与えていれば存続的性質と考えられるからであろう。この例をとってもやはり、本質的に備わった性質でない、不定冠詞単純現在総称文は使えないことが解る。

又、逆に specific なライオン達について Every lion has three legs が言えるのは、Every が「単なる偶然が重なった共通性」も表わせるからであろう。Every cat stalks a cat 自体が総称文の一種と見なせるのは、この共通性に因果関係を見いだすことも可能だからだろう。このことから、一般性とは「因果関係があって共通性があるもの」とみることができる。Langacker が言う様に、一般性には perfective なものと imperfective なものがある。しかし、それは、perfective が、時間的に制限が感じられ何らかの変化が意識される状態も含むからであって、基本的には一般性は存続的で imperfective なもので、A dog

barks タイプの総称文は本質的な因果関係そのものであり、時間的区切りと相いれない種類のものであると言えるだろう<sup>9)</sup>。

#### 4.2. Comparisons with Other Types of Generics

上記の様に A dog barks タイプの総称文を捉えてみると、主語や動詞の形が別パターンの場合との対照における、このタイプの総称文独特の文法的振る舞いの特徴にも、より明確な説明を与えることができそうである。

まず、無冠詞複数の総称文と比べると、A dog barks タイプの総称文は、参与者の集合が背景化された、不定冠詞という限定詞固有の文法的にも単数でかつ「単一のもの」が念頭におかれた表現であることは、広く知られていることでもある。

(24) a. Dodos are extinct.

b. \*A dodo is extinct.

(25) a. { A madrigal is /Madrigals are} polyphonic.

b. {\*A madrigal is /Madrigals are} popular.

cf. A football player is popular.

これだけでも、(24b)の意味が通らないことは説明可能だろう。一匹では extinct という形容詞の対象になりえないからである。(25a, b)に見られる対照も、同様の説明に多用される例である。勿論 madrigal が popular であれば、複数がイメージされることは、この対照を生み出す理由の一つかもしれない。しかしながら、任意の一個では駄目と言うだけでは、a football player であれば popular と言えるのに、a madrigal は popular と言えない理由にはなりそうにない。文の真偽性を問わないとすれば、madrigal と呼ばれるもののどれを一つ取って

9) これは、mass noun を区切ったものとして見なすと、count noun になるのと平行であり、何でも区切れるかというところでもないこととも平行である (cf. \*an infomation, \*a perfectivity)。

も人気がある時期があってもいい筈で、全く意味を成さないとまでは考えにくい。Declerck(1991)はこれについて、類のどの一つにもあてはまる特性というのは、類の必要条件的な特性だからだと言っている。だが、類のどの一つにもあてはまる特性が何故必要条件的かは説明していないし、類のどれにもあてはまる必要条件的特性としては同じである The madrigal is popular がなぜ容認可能かも説明していない。やはり、任意の一個ということに加えて、存続的で本質的な性質を表わすという要素を考慮に入れないと、a madrigal が popularity という属性と馴染まない理由は説明できない。即ち、(25b)の a madrigal が駄目なのは、人気というのはどれだけ続くにせよ、いつかは終わる事であり時間的制限を意識する性質のものであり本質的とは言えないからであろう。

又、総称を表わす不定冠詞のどれ一つをとっても当てはまるという側面や単一である側面だけを考慮すると、Jespersen(1933)や Perlmutter(1970)が述べる様に、any や one から派生したとみなすことも可能だが、勿論 a は any や one と同じではない。容認可能性に違いがある現象としては、現代英文法辞典や Krifka et al.(1995)でも既にある程度言及されており、ここでは簡単にとどめるが、(26a-d)の例から解ることは、要するに、any は negative polarity や極端なものを意図したり、誇張表現となったりして、付加的な意味を持ち、本質的な部分とは、ずれる側面がありえることだろう。

(26) a. {A /\*Any} cat does not like a dog.

b. {A /\*Any} rhino (with three legs) is common.

c. {A /\*Any} rhino weighs four tons on average.

d. {A /\*Any} beaver is an amphibious rodent.

(27) {A/ \*One} knowledge of English is an asset in most walks of life.

One と比較すると、不定冠詞の方には、単に純然たる一個ではなく、背景化はしていても、不特定多数のうちの一つや、数えられないものの一側面を表わす

性質が見える。

前述した様に、habituals と A dog barks タイプ総称文の決定的な違いは、前者は一時的な一般性が表わせるのに、後者はできないという所にある。文法的に単数という点では Fido barks 等の habituals も A dog barks と同じなのであるが、habituals の主語としては、背景にもどこにも集合は存在しない。その唯一的主語の属性の一つが habituals だといえる。従って、特定の個に対する継続的な identity が可能で、かつその属性も本質的である必要はないので、一時的な性質や一般性を表わすことができるのである<sup>10)</sup>。この点では、habituals は複数主語の総称文と同じグループに属する。

(28) a. Fido barks strangely these days.

b. Children have longer legs these days.

c. \*A child has longer legs these days.

無冠詞複数主語の場合、特定の複数とは限らず、単に複数に関する時間的に広がりのある知覚経験として、「異なる個体かどうかにも特に意識しない不特定多数に継続的に観察される状態」であり、これも本質的である必要はなく、一時

10) 冠詞の総称文との相違について述べるには、定冠詞そのものの意味特性を先に論じる必要があり、本稿の意図は総称文を網羅的に論ずることではないので、ここでは省いた。が、おおまかなところだけを押さえておくと、定冠詞は「文脈やコンテキストや知識から、あるいは想定的に等、とにかく identify できるはずのものだから identify しろ」という指示的な意味を持つと考えられる。従って、定冠詞の総称文は、何らかの意味で identification ができる抽象的なもので、文法的には単数でも identify される集合全体を一括りにしたカテゴリーとしての単数である。

(i) {The/\*A} potato was first cultivated in South America.

(ii) a. The dodo is extinct.

b. \*A dodo is extinct.

(iii) a. {The/A} motor car is a practical means of conveyance.

b. {The/ \*A} motor car has become very popular.

(iv) a. {The/a} madrigal is polyphonic.

b. {The/ \*a madrigal} is popular.

c. A football player is popular.

(v) a. {The/\*A} honeybee has a complex social system.

b. {The/\*A} lion is numerous.

的ということもありうる。

結局(29a, b)は可能なのに、(29c)が容認可能でない理由も、実はこの辺にあると思われる。

(29) a. My cat is stalking that bird every morning again.

b. Cats are being born with extra toes these days.

c. \*A cat is being born with extra toes these days.

即ち、背後に不特定多数が存在するとはいえ、不定冠詞主語総称文は、任意の単一個体に存在する本質的性質を表わし、時間的な制限を意識させる these days とは相いれない。だから、勿論 be+V-ing の V の位置の動詞の表わすものとして、ひとまとまりの事態を要求する進行形とも相いれない。又、特定の意味に取っても、主語に関する偶発的現象でしかない一方、these days は一時的とは言え継続的事態であることを表わす。従って、(29b)には整合的な意味の通る解釈ができないので、非文と判断されるのである。

#### 4.3. Non-animate and Quasi-Singular Generics

c. {The/\*A} dodo is extinct.

(vi) a. {The/ ?A} poem should be read in silence, not the play.

b. {A/ ?The} poem should be read in silence, not declaimed.

(via)はジャンルを問題にしており、the play との平行性という点でも定冠詞が自然であり、(vib)は読むという1回の行為の対象として、不定冠詞の方は、任意の一つの詩という意味で、すっきり意味が通るが、(vib)の定冠詞の方は特定の詩が問題になり、これだけではidentifyできない分だけちょっと違和感が生じる。

面白いのは(vii, a-e)はいずれも全く普通の総称文だが、(c-e)では定冠詞の方は容認可能でないことである。これは、「鳥」という余りに広いカテゴリーだけでは卵を産むという具体的な動作と結び付けるだけの identification ができにくいからではないかと思われる。

(vii) a. {The/A} beaver builds dams.

b. {The/A} turtle lives a long life.

c. {\*The/A} bird lays eggs.

d. {\*The/A} lion has a mane.

e. {\*The/A} duck has colorful feathers.

既にお気づきの様に、ここまでは主に生物や非人工物が主語の総称文を問題にしてきた。先行文献の不定冠詞総称文の例がそうなので自然とそうなのだが、それは総称文というのは、典型的・基本的に一つ一つが異なることを意識したものの集合の一般性を求めたものだからであろう。百科事典に掲載されている生物に関する事項は案外不定冠詞単純形の総称文というのは少なく、無冠詞複数が多いいのは、やはり余り非科学的なことは言えないので、本質的なことを言う構文を避けて、慎重に物を言おうとするからだと思う。人工的なものや多少違いはあっても同じように見なしているものについては、不定冠詞主語総称文も、百科事典的なものにでも頻出するようである。人工的なもので特に大量生産品などは基本的にもともと同じか又は同じと見なしているものについての記述なので、putative な一般性というよりは、物の説明で、単に性質という感じがするからだろう<sup>11)</sup>。

(30) a. A violin has strings like a guitar.

b. A camera works very much like an eye.

c. A bicycle pump compresses air.

d. A bathroom scale uses a spring to measure weight.

ここで確認しておきたいのは、本稿で示した these days や過去形等と相いれない不定冠詞総称文の特性も、生物が主語の場合についてのものの様だということである。

(31) a. \*Once upon a time, there was a peaceful village near the sea. In those days, a cat was able to talk. ...

b. \*A cat is born blind these days.

(32) a. In those days, a computer was as big as a bathroom.

11) 科学論文等で、定冠詞の総称文が多いと言われるのは、抽象性が高い内容が多いことと、専門家同志で理解しあい identify している事項についての一般性を問題にすることが多いからではないだろうか。

b. In those days, a floppy disk was as big as an EP record.

c. A movie had no sound in those days.

d. A TV monitor will be flat and and as thin as paper in the future.

人工物の場合は、現在形でも過去形でも法助動詞があっても構わない。これは、同じ名前で呼ばれても、昔のものと今のものとで本質的なところで異なりうるからだろうと思う。それに比べて、猫の DNA 的な本質が変われば、多分名前も変わるので、生物の場合2000年前の猫も本質は同じはずだからおかしいと感じられるのではないかと考えられる。

これに関連してもう一つだけ最後に付け加えておきたいのは、不定冠詞で nonspecific で nonreferential なものが必ずしも A dog barks と同じ総称文ではないということである。Langacker(1997: 193)に habitual として登場する例文で次の様なものがある。

(33) In those days, a family bought a new car every four years.

この例自体は habitual として認識され、特定の家族の過去の習慣に関する記述であり、A dog barks とは全く違う種類に属するので、不定冠詞が使われてもこれまで言ってきたことの反例にはならない。だが、a family は nonspecific の意味に取る事もでき、かつ(34)の様な文自体は容認可能である。

(34) A child was dying every 5 minutes in those days and now that s happening every 5 seconds.

これは、形だけを見ていると、一見 Langacker の言っていることにも、ここで述べてきたことにも反する様に見える。だが、筆者としては、(34)は、A child 一人一人に存在する存続的性質の記述ではなく、その時点での統計上の割合としての事実を述べているので、総称文ではないと考える。従って、A dog barks タイプの総称文の特徴とは、形の意味の組み合わせによって生じる意味特性だが、やはり形だけではなく、我々の一般性認識に関わる意味的なものである事

と言えるだろう。

## 5. Conclusion

以上、本稿では A dog barks タイプの不定冠詞主語総称文の特徴や意味特性について不定冠詞の特性と単純現在の組み合わせという観点から考察した。そこからは、不特定多数の存在を背景としたその中の任意の一個についての存続的な性質、即ちどれを一つとっても当てはまる本質的な特徴を表わす事が導けることを示し、本質的な性質というのは、時間的な制限の意識とは相いれないことから、不定冠詞主語総称文の意味が時間的な制限を意識させる進行形と相いれないことを論じた。A dog is barking が総称の意味で解釈できない理由はここにあり、specific な解釈を生むと考えられる。

## REFERENCES

- Bybee, Joan and Osten Dahl (1989) "The Creation of Tense and Aspect Systems in the Languages of the World," *Studies in Language* 13, 1: 51-103.
- Dahl, Osten. (1995) "The Marking of the Episodic Generic Distinction in Tense-Aspect Systems," *The Generic Book*, ed. by Gregory N. Carlson and Francis Jeffry Pelletier, University of Chicago Press.
- Declerck, Renaat (1991) "The Origins of Genericity," *Linguistics* 29, 79-102.
- Goldsmith, John and Erick Woisetschlaeger. (1982) "The Logic of the English Progressive," *Linguistic Inquiry* 13: 79-89.
- Harder, Peter. (1996) *Functional Semantics: A Theory of Meaning, Structure and Tense in English*, Mouton de Gruyter Berlin • New York.
- Jespersen, O. (1933) *Essentials of English Grammar*, George Allen and Unwin, London.

- Krifka, Manfred et al. (1995) "Genericity," *The Generic Book*, ed. by Gregory N. Carlson and Francis Jeffry Pelletier, University of Chicago Press.
- Langacker, Ronald W. (1987a) *Foundations of Cognitive Grammar, vol. 1: Theoretical Prerequisites*, Stanford University Press, Stanford.
- Langacker, Ronald W. (1987b) "Nouns and Verbs," *Language*, Vol. 63, No.1, 53-94.
- Langacker, Ronald W. (1991) *Foundations of Cognitive Grammar, Vol.2: Descriptive Application*, Stanford University Press, Stanford.
- Langacker, Ronald W. (1996) "A Constraint on Progressive Generics," *Conceptual Structure, Discourse and Language*, ed. by Adele E. Goldberg, 289-302, CSLI Publications, Stanford, California.
- Langacker, Ronald W. (1997) "Generics and Habituals," *On Conditionals Again*, ed. by Angeliki Athanasiadou and Rene Dirven, 191-222, John Benjamins, Amsterdam.
- Perlmutter (1970) "On the Article in English," Bierwisch and Heidolph (ed.) *Progress in Linguistics: A Collection of Papers*. Janua Linguarum, Series Maior, Nr. 43. Mouton de Gruyter, The Hague.
- Vendler, Zeno (1967) *Linguistics and Philosophy*, Cornell University Press, Ithaca.